

第4章 漁村における民家調査

——牛深加世浦・真浦地区を事例として——

張 麗山

はじめに

筆者は2011年7月26日と27日に、天草市牛深町で民家建築を中心とする調査を行った。それは、加世浦と真浦という二つの漁村集落に対する調査である。本稿は先行研究を踏まえて、戦前までの漁村集落風景を復元しようとするものである。プロセスとしては、牛深漁村の特徴とされる中二階・せどわを取り上げて、更に有名な遊廓との関係などを検討していく。

一、中二階

中二階とは、「建物の正規の階の間に床を設けてつくった通常の高さより天井が低い二階」であり、牛深には、そういう中二階様式の建物が多く点在する。私たちは牛深市加世浦にある中二階の建物を現場調査する機会を得たので、ここで私が見た中二階の建築構造について紹介したい。

加世浦に入るとすぐ気がついたのは、ほとんどの民家が二階建てだったことだ。また、その中に木造で普通の二階建てより低い屋敷がある。それは、すなわち当地独特の漁村民家である中二階の様式だ（写真1）。中二階の由来について、

牛深市職員メモによれば「自然発生的なものでなく、税制上の点から規制が加えられていた」ことがひとつの理由として言われており、実際「一人あたりの住戸専用面積も規制されていた」ようである。一方、熊本大学堀内研究室による先行調査によれば、「風を強く受けるため、建物の高さを抑えている」という説もある。また、建設コスト削減という視点からも中二階にしているという説もある。¹⁾

と黒田侑香氏が先行研究をまとめており、

真浦・加世浦地区の特徴的な住まい作りとして、中二階の家が多くを占めており、階高が低くこれは、風通しをよくするためではなく、台風や海風から避けるためと金銭的な問題のためである。²⁾と結論付けた。ここで、中二階の中に立ち入って、その構造からもう一度考察してみる。

1) 黒田侑香・野口裕子「「せどわ」をもつ漁村集落の空間形態と暮らしに関する研究——牛深市真浦・加世浦地区の変容過程に着目して——」（平成17年（2006）度有明高等工業専門学校卒業研究）、18頁。

2) 同上、66頁。



写真1 中二階

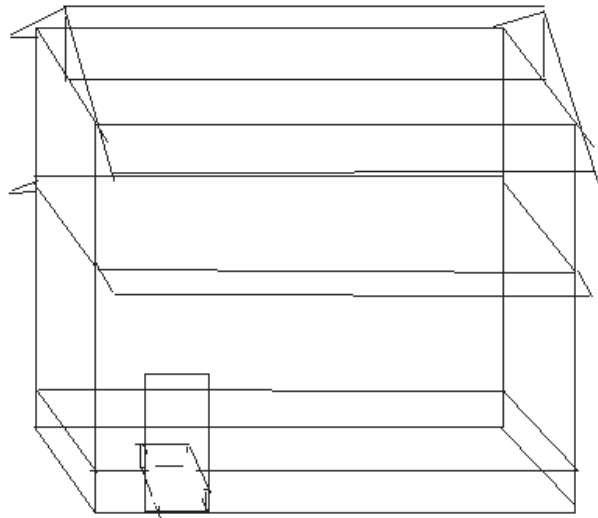


図1 中二階の構造図



写真2 一階の居間

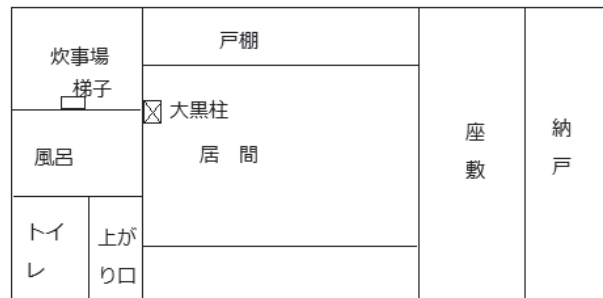


図2 一階の平面図（推定）

調査を行ったのは目測で長さは7メートル、幅は5メートル、一階の高さは2.1メートル、二階は中央部が2メートル、両側が1.5メートルの建物である。ただし、敷地から下げた0.5メートルぐらいの地下空間がある。家屋の正確な間取りはわからないが、構造から推測すれば、図1の示す通りである。

一階は、上がり口の左がトイレ・風呂と炊事場であり、右が座敷と納戸である。台所には竈がなく、ガス用の炊飯器が置いてある。台所と便所の間に二階へと上がる険しい梯子が立ててあった。台所の右側に戸棚が付いている。戸棚の前は広い居間となっていた。居間には何もなく、板が壊れたところもあるため、気をつけずに歩くと、転ぶ恐れがあった。居間の右が座敷である。居間と座敷の間に格子戸があったはずであるが、今は格子戸が全部はずされて座敷のところで積んである。窓を開けていないため、家の中は真っ暗である（写真2、図2）。

炊事場の前にある険しい梯子を上ると、二階である。まず見えるのが8平方メートルぐらいの狭い部屋である。一階の居間と座敷の上の部分は二階の座敷となった。その隅が納戸として使われていたようだ。ここも窓がないため、真っ暗で蒸し暑い（写真3、図3）。

屋敷は木材で骨組を立てて、四面の壁が泥土などで築かれた（写真4）。大黒柱が台所、便所と居間と

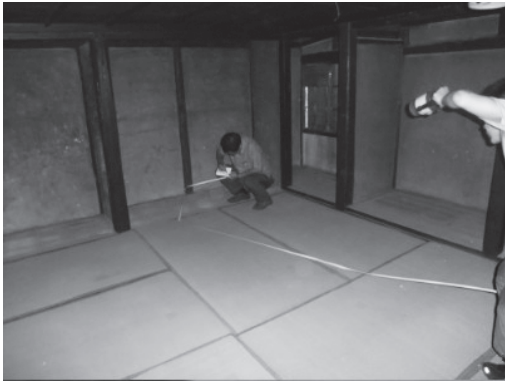


写真3 二階の座敷

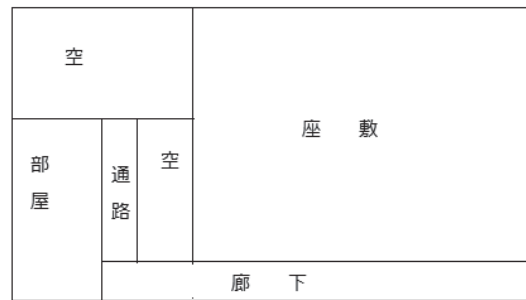


図3 二階の平面図（推定）

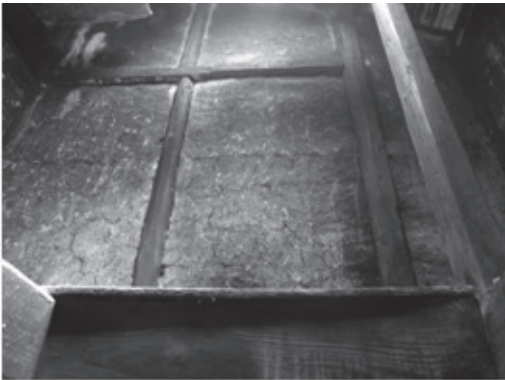


写真4 柱と泥



写真5 大黒柱

の間にあり、大黒柱から玄関方向までの桁がつつつつとしている（写真5）。

地元の人の話によると、それは夜遅くまで漁業してを終わって帰る漁師に、その桁の光をよく反射させることで自分の家であることと知らせたそうである。つまり、灯台のような働きをしていたのだ。

以上の調査によると、このような狭い家屋で生活するのはさすがに快適だとはいえない。ただし、数多くの柱からみると、台風や海風を防ぐためのものだと考えられるが、金銭的な問題なのかは不明である。また、黒田氏の研究に見られた「あがり口から仏壇がみえるように作られている」「便所はみんな、上り口の右手に、はなれとしてあった」などの調査結果³⁾は、今回の調査では確認されなかった。

二、せどわ

7月27日、主として加世浦と真浦の「せどわ」を歩いて、住宅の類型や門の向きを確認した。

「せどわ」は、漢字で「背戸輪」でも表記されるそうである。加世浦や真浦にあったこの狭い道は、狭い場所という意味も含まれた狭い路地「せどわ」が迷路のように張り巡らされており、それに沿って

3) 「牛深市加世浦漁業集落調査予備調査報告書」（熊本大学工学部建築学科 堀内研究所）、1頁。



写真6 セドワ

住宅が高密度に立ち並んでいる。セドワは一見、それぞれが生活道路として認識できるものでなく、住宅と住宅の隙間を縫うように分布しているが、その形成化に注目すれば、海に向かいその内部から多くのセドワが伸びていることが特徴的である。⁴⁾

実は、セドワのような路地が、少なくともむかしの中国の江南地方でよく見られた。狭い土地で沢山の住民が住めば、道を狭くして密集的家屋を建てるのは当たり前のことだ。ただし、中国の場合はその路地が青い煉瓦で敷かれ、「小巷」や「里弄」などと呼ばれる。したがって、牛深のセドワを歩くとき、思わず中国のことを思い出した。セドワは、幅が狭いが、風通しがいい⁵⁾。中国の場合は風通しがよくなければ風水がよくないと考えられるので、風通しがいいように工夫する。ところが、牛深の地元の人によれば、当地では事前に風通しがよいうように設計されなかった。つまり、自然に風通しがよくなるのだ。実は加世浦や真浦の地図を見れば、まったくそうであるともいえない。前にも指摘されたように、村落の入り口はすべて意識的に海に向けるように設けられる。それで、強い海風がいつもセドワを通して村落に吹き抜ける。そして、海風だけでなく、裏にある山からの風もある。それらの風がいくつかの角度でセドワに吹き込み、風を流通させるのであろう。

もちろん、セドワの形成が漁業生活と深く関わる。前述した中二階は、本当に狭い空間で、基本的な生活場所として、のんびりとした生活ができそうもない。つまり、それはあくまでも、食事や寝るための空間である。農業生活と異なり、大量の食糧や農耕用具などを置く大きな空間を必要とせず、道も歩くことができればいいのである。まして、当地の用地も確かに狭い。それらの要素によって、セドワがだんだんできあがった。ただし、全体的に、セドワがある程度の円滑や直線があり、めちゃくちゃでくねくねとした通路ではないことから、新しい住宅が建てられるときに、やはり風通しを妨げないように工夫したと思われる。ちなみに、このようなセドワでは自動車が通れないので、活躍するのはもっぱら自転車やバイクである。

4) 前掲注1、17頁。

5) 「風通しが良いと思う」人が約74%を占めた。(前掲注1、24頁)

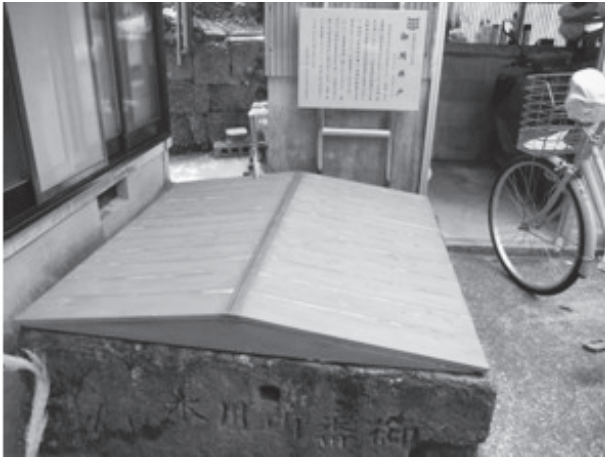


写真7 御番所用井戸



写真8 小屋

せどわや中二階などのような、生活が不便な特徴としてもう一つの例が挙げられる。それは、井戸である。海に近くて淡水が乏しいためか、廃棄された昔の井戸が数カ所確認できた。その中には、「昭和50年（1975）6月10日天草市指定文化財」と記された御番所用井戸も見つかった。

その傍に立てられた札の内容を紹介しよう。

天草初代代官鈴木重成のときに、富岡、大江、魚貫崎に遠見番所がおかれましたが、その後、寛政十年（1798）に、沿岸監視体制強化のため、長崎奉行直轄の牛深湊見張番所が新設されました。湊番所は御用船を備え、普請役部屋や水夫部屋がありました。この御用井戸は文化九年（1812）に湊番所専用掘られたものです。一般の人々は使用を禁止されており、石組みの井戸枠には「御番所用水」と刻まれています。当時、井戸は数基掘られたらしく、付近には文化元年（1804）のものも残されています。

そのほかに、屋敷の外にかつての「便所」だと思われる建物がある（写真8）。それらの特徴によって、昔の漁村の生活を大体想像できるであろう。つまり、このあたりは、住宅が密集していて、漁業が盛んであった。多くの漁師たちが朝早く家を離れて、細長いせどわを抜けて海に出た。一方、女性は狭くて素朴な自宅で、忙しく家事をせずに、どこかで他の仕事をしたり、夜に灯りを点けて旦那の帰りを待っていた。

三、遊郭

せどわや中二階などを通して、素朴な漁村生活が想像できる。一方、前述した漁村と遠くないところに、昔の遊廓として残ってきた立派なお屋敷が見えた。それは、旧紅裙亭（写真9）と旧三浦亭である。

紅裙亭は、新銀取り坂の道端にあり、玄関の屋上に豚の頭の姿をしている恵比寿像が飾られている（写真10）。その建物は、上に紹介した中二階より随分広い。ところが、二階建てなのに、中二階の様式が認められる。紅裙亭は昔の置屋で、豊富な資金を持っていたはずだ。だから、中二階の様式を採用するのはやはり台風や海風を防ぐためと推測できよう。紅裙亭と遠くないところに、もっと立派な屋敷があり、



写真9 紅裙亭



写真10 新銀取り坂

すなわち三浦亭である。この屋敷もかつて料亭として、大変隆盛した時期があったらしい。何軒の小屋敷からなり、周囲が高い塀で囲まれている。地元の人によると、以前は、各地から沢山の女性がこのあたりで商売をした。漁獵から戻ってきた漁民が家に帰らず、みんなまずこの旅館で遅くまでお酒を飲みながら、店の女の接待を受けたようである。そして、周りを囲む高い塀は遊女を逃がさないように設けられたのだといわれる。ただし、三浦亭は高い二階があり、牛深で普通に見られる中二階と異なっている。ところが、三浦亭は山の麓に建てられたから、強い風への対策は必要としないかもしれない。

今では紅裙亭と三浦亭の二軒しか残っていないが、かつては新銀取り坂を挟んで多くの遊廓があったそうである。それは、加世浦や真浦の狭い生活空間と截然と相違している。この遊廓をめぐる、遊女が地元の人でお客が外地から暫く寄ってきた人であるという説と、遊女が外地からの人でお客が牛深の漁民だという説がある。江戸時代のことはよく分からないが、明治や昭和時代においては、後者の方が適当だと思われる。その理由については二つ挙げられる。まず、三浦亭の周りを囲む塀が遊女を出さないように設けられたからで、それは外地からやってきた女性のことだとしか考えられない。次に、カツオ漁業の時代に、漁民がみな富裕であった。その窮屈な漁村に帰るより、ひとまずこのあたりの遊廓地で楽しむと考えられるであろう。

終わりに

以上、せどわ・中二階と遊廓を通して少しではあるが、漁村の風景を描いた。それによって、かつてのせどわ・中二階と遊廓の間には漁村漁業として結ばれていた絆が見えるだろう。

ちなみに、加世浦で奇異な模様を飾った板壁が二カ所見付かった(写真11)。「ある大学の先生は、この模様が中国から伝わってきて、魔除けの働きをしていると仰った。」と地元の人と話していた。正直に言うと、筆者は中国において壁でそのような模様の飾りを見たことがない。中国では、古くから鎮宅の模様が確かにあり、それは邪気と魔物などを丸飲む貔貅という神物であった。牛深にある三角形の模様が貔貅の姿を変容したものであるか、あるいは当時の漁民が中国まで商売に行って、直接どこかのもの

をまねたとも考えられる。牛深漁村の生活風貌からして、全くありえない話とはいえない。



写真11 魔除け模様

